

清水均先生ご退任に寄せて

Our Remembrances to Dear Mr. Shimizu

茂木信太郎*

MOGI, Shintaro

本学科の礎を四半世紀にわたって営々と築きあげてこられた清水均先生が、この2016年3月をもってご退任される。清水先生の本学ご着任は、1991（平成2）年と古い。

ご着任早々に、横澤利昌教授、大江宏教授（いずれも現名誉教授）とともに、アメリカ各地でホスピタリティ教育の視察と情報収集の任にあたり、その成果を報告書に取りまとめられた。これが当時の本学「ホテル・観光学講座」の充実、その後の「ホスピタリティ専攻」の開設、そして「ホスピタリティ・マネジメント学科」の設置の指南書となった。清水先生は、まさに本学科中興の祖として讃えられるべきお方である。しかも、本学における身分は、最初から最後まで「非常勤講師」である。

本学科でご担当いただいている授業は、1年生対象の専門必修科目「フードサービス実務論」（後期）、2年生「基礎演習」（通年）、3年生「応用演習」（通年）、4年生「総合演習」（通年）と全学年にわたり、多くの卒業生を世に送り出すことを長年継続されてこられた。「非常勤講師」と

いうにはあまりに過重なご負担を強いてきているといわざるを得ない。かようなお方の善意と能力と誠意に支えられてこそこの本学科の現在であると感謝の念に堪えない。同様の想いは、本学挙げてのものである。同時に、今回のご退任が、ご健康上のことが大きいと伺い、その想いは一入のものである。

さて、本誌では、清水先生にまつわるさまざまな歴史やエピソードが集まると思われるので、ここでは、私の個人的な清水先生との触れ合いの一端を述べさせていただくにとどめたい。

清水均先生は、以前よりフードサービス業界などサービス業を得意とするコンサルタントが本業である。斯界では、名実ともにその第一人者である。一方、私は、30数年にわたりフードサービス業界を観察する立場で仕事をしてきている。したがって、業界団体の会合や後には学会での研究会などでもご一緒あるいはご同席させていただくこともないわけではなかったが、存外、そうしたところでお目にかかる機会は多くはなかった。そして、正直のところはじめて清水先生お目にかかっ

*本学経営学部教授

たのが何時のことであったかは記憶にはない。ただ、私の記憶にあるのは、すでにご高名を馳せておられた清水先生からいつも気安くお声掛けいただいていたということである。しかもその際に、私の書いたものやTV出演時の際のコメントなどもよく覚えておられ、何か一言添えられて下さることが多かった。失礼ながら、よくよく勉強されておられ目配りを広く構えられているお方だという印象を有していた。

あるとき斯界でも、衛藤審吉先生が亜細亜大学の学長となり、フードサービスビジネスを核の1つとするホスピタリティ分野に大学を挙げて本格的に取り組まれるという方針を掲げておられるということが、口の端に乗るようになった時期があった。そして、まもなく、清水先生が月刊誌などで連載される記事には、清水先生のタイトル（お肩書）に「亜細亜大学講師」が登場するところとなった。読者としては、「清水均先生」+「亜細亜大学（衛藤審吉先生）」＝「フードサービス教育研究の総本山」というイメージが繰り返し繰り返し刷り込まれるところとなったのではないかと思う。

なにしろ、フードサービス業界はまだまだ伸び盛り、大手チェーンレストランへの社会的注目度も高ければ、異企業からの新規参入や若人の起業も旺盛に繰り返されていた時代である。業界人も周辺業界の人たちも、情報を求めて誌紙を買いあさりむさぼるように読んで、その度に、「プロジェクト・ドゥ・ホスピタリティマネジメント研究所」を主宰し「亜細亜大学」で教鞭を取られている清水均先生の記事を目にしたのである。ネットやスマホ依存の今とは異なり、『商業界』『飲食店経営』『日経レストラン』『週刊ホテルレストラン』（『HOTERES』）、「日経流通新聞」（現「日経MJ」）などが、妍を競うようにフードサービス業界の動静を報じていた（今もそうであるが）。これらの誌紙を総なめして、例えて言えば、烏が鳴かない日があっても清水均先生のお見かけ

しない月はなかったはずである。

ことは業界誌紙に留まらない。日本フードサービス協会という業界団体がある。清水均先生は、同会から請われて協力アドバイザーを務めておられる。ここでは、同会会員各社が申し合わせて、数日間にわたる新入社員の集合研修を実施している。ある意味、呉越同舟の研修会であるが、清水均先生は例年ここでの責任研修講師を務めておられる。あるいは、全国の商業・フードサービス事業者が集う「商業界」の幹部研修会や社長会でも定期的に主宰講師や講演を務めておられる。要するに、清水均先生のご薫陶に接して斯界で活躍しておられる方々は、本学の卒業生に留まらないのである。

世に問うた書籍も多い。なかでも斯界で俗に「フードサービス攻め手シリーズ」ともいわれる7冊（いずれも商業界）は、およそ業界人ならばどこかで目に触れ手に取られているはずである。『フードサービス攻めの計数』（1994）、『フードサービス攻めのマネジメント』（1999）、『フードサービス攻めの成長戦略』（2002）、『フードサービス攻めの組織・人材育成』（2003）、『フードサービス攻めのパート・アルバイト戦略化「完全」マニュアル』（2004）、『フードサービス攻めのメニュー戦略』（2007）、『フードサービス攻めの計数問題集』（2010）。

さらに『ホスピタリティコーチング』（2007、日経BP社）は、本の帯に「サービス業のための」というコピーが添えられているが、サービス業種のみならず、メーカーなどでも大手企業などでは、人事担当あるいは教育研修部署でまとめ買いされ、最新の理論と豊富な事例と分かりやすいフォーマット例示で、各企業内研修やマニュアルなどにも広く援用されていると仄聞している。清水均先生の本書出版から10年近くが経って「コーチング」は、スポーツ界や教育界にまで広まりつつある。清水均先生は、ある意味「コーチング」

という概念・手法をわが国に普及させた最大功労者のお一人と評せられる。

繰り返すが、そのほとんどがベストセラー、ロングセラーとなっている清水先生のご著作の奥付けにある著者紹介欄には「亜細亜大学講師」の7文字が入っており、本学の名称がわが国の実業界で活躍する人たちの大勢に紹介され続けてきたという功績は、声を大にして言いたいところである。敷衍すれば、本学科生のみならず本学卒業生が、就職活動で企業の人事部（ほとんど教育部署を内包する）の方々や面接などで接する時には、その方々は少なくない割合で清水均先生のご著作に触れた方々であると推量されるのである。

私が本学に赴任したのは、本学科の設置に伴うもので2009年である。本学科赴任が決まって半年ほどの時間があつたので、その間に清水均先生から色々のご指導を仰ぐことができた。また、着任後は、同じフードサービス領域を担当するという事で何かにつけご相談に乗っていただいた。私も各学年の「演習」を担当しており、たまには合同の「演習」や食事会も企画実行することができた。そのなかで、最もありがたかったのは、専任教員が担当する実習科目である「フードサービス研修Ⅰ」「フードサービス研修Ⅱ」「フードサービスインターンシップ」(現名称、「ホスピタリティインターンシップ」)のプログラムを設計するにあたり、直接に清水均先生から研修先、インターンシップ先のご紹介をしていただいたことである。本学科の「ホスピタリティインターンシップ」

(2単位)は3年生の必修科目であるため学科生は、専任教員の誰かの指導を仰ぐかたちで「インターンシップ」を受講履修する。フードサービス系は私の担当となる。そこで、早速に清水均先生のコンサルティングなどご指導先を中心に、企業理念が明確で、人事教育体系がしっかりとしていて、手間暇のかかる学生の2～3週間ほどの受入をお願いできそうなフードサービス企業のトップをご紹介していただくこととした。一も二もなくその場でいくつかの企業名を挙げるとともに、直接に私を帯同してその企業へご依頼に足をお運びして下さいました。

これら実習科目の充実はいわば本学科の顔の1つである。おそらく、他大学で類似のカリキュラムを作成しても、失礼ながらその内実は似て非なるものではないかと密かに自負しているところである。それもこれも清水均先生が本学と業界各所に積み上げてきて下さったレガシーであると切に思う。清水均先生が本学を離任された後々まで、清水均先生のご威徳を継承していくことが私たちの使命であるとあらためて思う次第である。

清水均先生のご健康の回復を願うとともに、「元亜細亜大学講師」のお肩書もご使用されつつ引き続き業界との橋渡し役をお願いする次第です。ひとまずの本学で長期間にわたりご尽力されました教学と学生指導と業界へのお導きに絶大なる感謝の意を表意したいと存じます。ありがとうございました。